

国際結婚をしたフィリピン在住韓国人女性にみる現代史

久津美 香奈子

くつみ かなこ

私は長年にわたり、フィリピン在住の韓国人の生活に関心をよせてきた。韓国人の人数はおよそ 3 万人にのぼる。

マニラ首都圏のビジネス中心地であるマカティ市を歩くと、韓国人による食品店、レストラン、カラオケ店、ホテル、美容室、ビデオ店など、多くの自営業が密集しており、キリスト教会もあることに気がつく。ここは、2003 年 2 月、マカティ市長によって正式にコリアン・タウンと命名されており、英語やタガログ語を習得しなくとも、韓国語のみで生活できる環境がフィリピンには整っている。フィリピンに韓国人の社会が根付いていることがわかる。

韓国とフィリピンの国際関係を遡ってみると、1950 年 6 月 25 日に勃発した朝鮮戦争を機に始まったといえる。朝鮮戦争には、およそ 8,000 人のフィリピン軍人や技術者たちが参戦し、1953 年 7 月の休戦後も韓国に残留した人々がいる。

その当時、韓国でフィリピン人男性と知り合い、国際結婚をした韓国人女性たちがいた。彼女たちは夫と共にフィリピンへ渡り、そのほとんどがマニラ首都圏で生活をスタートさせた。

私は、2003 年 1 月から 2 月にかけて、調査のためフィリピンに短期滞在をした。この時、フィリピンに住む韓国人の既婚女性たちによって運営されている「在フィリピン韓国婦人会（以下婦人会）」の会合に出席する機会を得ることができた（会員数は約 135 人）。

この婦人会が、旧正月の行事を韓国レストランで開催した。そのお祝いの席で、私は朝鮮戦争時にフィリピンから韓国へ渡ったフィリピン人技術者と国際結婚をした 70 代の A さんと知り合うことができた。

婦人会主催の行事の冒頭は、韓国およびフィリピンの国歌斉唱（フィリピンの国歌は参加者全員がフィリピン語で歌っていた）で始まった。

A さんは、韓国の国歌斉唱がはじまると途端にポケットからハンカチを取り出して、ボロボロととめどなく溢れてくる涙を拭っていた。声がつまって歌にならないかのような様子だった。彼女が肩を震わせながら涙ぐむ姿は、多くの言葉で彼女の人生を語らなくても、切々と訴えているように私には感じられた。

会食後、A さんは私のほうに來られて、自分の人生を語ってくださった。ひとこと、ひとことから、現

代史がみえてくるかのようであった。それぞれの時代の波に流されながら、また、あわせるように生きながらも彼女の人生があり、彼女の意志によって人生を切り拓いてきたという力が漲っているようにみえた。彼女は、流暢な日本語を使って次のように話した。

「フィリピンに1974年に来たのですよね。フィリピンに来てから、韓国の愛国歌（国歌）を歌ったことがありませんでした。フィリピンに来てから30年間、歌わなかったのです。機会もないし、忘れちゃったし。だから今日、愛国歌を歌って、感慨無量。それと今日、韓国の婦人たちと会い、フィリピン人と結婚した婦人たちにも会って、感慨無量で涙が流れました。嬉しくても涙が流れ、哀しくても涙が流れました。私は若い時にこの国に来たのに、今はおばあさんになったねえと泣いたの。その気持ち分かりますか。日本で13年。韓国で25年。ここで30年。」

フィリピン在住30年を迎えたという彼女の姿は、韓国語、日本語に加え、英語もフィリピン語も流暢に駆使し、みるからにフィリピン人女性のものであった。彼女の発音そのものがフィリピン人のようであり、私は彼女が韓国人であることを一瞬、忘れてしまうほどであった。私は、ついフィリピン語で受け答えをしてしまい、彼女は何人だろうかと頭の中が混乱するほどであった。

彼女のライフ・ストーリーは次のようである。Aさんは、朝鮮半島が日本による植民地時代の真只中であった1930年代に生まれた。Aさんが幼少の頃、当時、東京の大学に留学中のおばさんから、日本に来るようにすすめられ、Aさん一家は日本に渡ることになった。学齢期に達すると、第三国民学校に入学し、日本の教育を受けることになった。彼女は当時の記憶を次のように話している。

「第三国民学校は日本人ばかりで、韓国人は私と姉だけでしたよ。よく勉強しましたよ。夏休みにはホームワーク（宿題）がありました。虫捕りもして、バタフライ（蝶々）を採りましたねえ。ああ、懐かしいですねえ。春の小川はさらさらいくよ、という歌もうたいましたよ。」

「国民学校5年生か、6年生の夏休みに、先生と一緒に柳の木を植えたのですよ。その木にね、サインしたのですよ。私が韓国へ帰ってからも、大きくなっただろうなあ、時々、その木のことを思い出していました。機会があれば、国民学校へ行って、その木を見たいなあと思いつけていました。大東亜戦争の時代のことだから、もう木はないだろうとも思いましたけどね。1964年の東京オリンピックが開催された時に、日本に住んでいるおばさんに呼ばれて（20年ぶりに）、その国民学校にも行きました。そうしたらあったのですよ。木がありました。私を書いた字もありました。驚きました。木は大きくなっていましたからね。それを見て、泣きましたよ。懐かしくて。懐かしくて。人間だったら、死んでいないけれど。やっぱり自然はあったと思って。」

Aさんは、第二次世界大戦終結後、韓国へ帰国することになった。高校にも進学した。朝鮮戦争が勃発してからは、駐韓米軍基地内でタイピストとして働くことになった。その基地内で、建築家として仕事をしていて、生涯の伴侶となるフィリピン人男性と出会うことになった。韓国で1961年に国際結婚し、1974年にフィリピンに移住することになった。夫のことを次のように話している。

「お父さん(夫)は、教育的な良い家庭で育っていて、良い大学を卒業していて、教養のある人でした。私は他のフィリピン人と結婚した婦人(韓国人)よりも、そんなに苦労しなかったのですよ。」という。

フィリピン入国後、まもなくして夫はサウジアラビアへ出稼ぎに行くことになった。この時すでに2人の子どもがおり、Aさんは子どもたちのために両親がそろってフィリピンで一緒に住むことを願ったが、夫を引き止めることはできなかった。

1970年代という、韓国の建設業者が大挙して中東へ企業進出していた時期でもある。Aさんの夫は韓国語も使いこなすことができるようになっていたため、サウジアラビアでは韓国企業に就職し、建築家としての専門をいかすことができた。安定した収入を得ることができ、2人の子どもをフィリピンのインターナショナルスクールに入学させることができたという。高校卒業後は2人ともアメリカの大学へ進学し、今は独立している。

フィリピン移住後、Aさんにとっての第一の転機は、1987年に夫が亡くなったことから始まる。当時を次のように語っている。

「お父さんが死んで、とても苦労しましたの。でもゴッド(神様)が私にいい職場をくださいました。(外資系の)航空会社に就職して、日本語の通訳をしたのですよ。1990年頃から韓国人は自由に海外旅行できるようになったので、急にたくさん韓国人が世界中に行くようになりました。航空会社に通訳者として就職した人はみんな20歳前後の若い人たち。でもみんな日本語はできないのですよ。私はフィリピン語もできるし、韓国語、日本語、英語もできるから、航空会社に就職してからすぐにマネージャーにまでなりました。韓国人だから正直だし、熱心に仕事をするから、選ばれたのです。いい生活をすることができましたよ。」

夫が亡くなっても、Aさんは語学力をいかし、安心してフィリピンで生活を送るようになっていった。ところが、二つめの転機が訪れることになった。1997年にアジア諸国の経済を不安定にさせた、アジア通貨危機により、その航空会社の利用者数が激減し、撤退することになったのである。その後、無職となったが、Aさんは、熱心なキリスト教の信者で、2003年2月の時点では、教会生活を中心としながら、ボランティア活動に参加しているとのことだった。

Aさんは、私に自身の人生を語りながら、日本に対する望郷の念を示す次のような言葉も話していた。

「私が韓国でずっと今まで育っていたらこんな考えはないと思いますね。どうして私が日本に住むのではなく、フィリピンで住むことになったのでしょうか。フィリピンで住むことになって、ここでは、いつも日本人に会うし、日本語の看板を見たり、日本のラーメン屋を見ると、とても日本が懐かしいのです。」

また、自分の人生を回顧して、国際結婚について次のように語っていた。

「日本人は国際結婚をそんなに悪くみないでしょう。韓国人はそうではないのですよ。軽蔑するのは。正直に話しますと、そういうところがあるのです。」

この言葉から、私は A さんがフィリピン社会に適応しながら暮らすと同時に、フィリピンに形成されたコリアン社会から隔絶されていた様子を垣間見ることができた。

フィリピン人軍人や技術者と国際結婚をした韓国人妻を対象に調査をおこなった Kim, Sung Chul (1979) の研究がある (Study of Biculturation of the Korean Wives of Filipino husbands Residing in Metro Manila Area, University of the Philippines, MA thesis, Asian Studies). (「マニラ首都圏在住のフィリピン人夫を持つ韓国人妻の二文化に関する研究、フィリピン大学大学院修士論文」)。

これによれば、次のような指摘がある。「フィリピンに滞在している韓国人は、国際結婚を異族結婚 (exogamy) とみなし、異民族の血が混ざること忌避する傾向がある。そのためフィリピン人と結婚した韓国人妻たちを同民族の韓国人とみなさない。その時代、両者には精神面で近寄りたが壁が存在しており、相互に交流するという関係はほとんど形成されていない。」

1970 年代に、国際結婚をした韓国人妻たちによって、「母親会」という相互扶助を目的とする組織が結成された。韓国社会は、儒教思想の影響から、家系に他民族の血が混ざること好まず、国際結婚に対する意識は否定的な時代でもあった。

Kim (1979) の論文が完成してから既に 20 数年の歳月がたち、フィリピンの韓国人社会には、国際結婚に対する変化がようやく現れている。

2001 年の婦人会役員では、初めて国際結婚をした女性が会長として就任し、婦人会主催によって、国際結婚の家族との交流会が開催された。同年、「韓国・フィリピン家族協会」が結成され、2003 年 2 月現在の会員は約 70 世帯 (そのうち 80% が韓国人夫、フィリピン人妻のカップル) である。毎週土曜日には、2 世の子どもたちや、フィリピン人妻を対象に、韓国語教室を開いている。

国際結婚をした彼ら、彼女たちが自ら社会組織を結成することによって、2 世への言語および文化の継承に力を注ぎ、韓国とフィリピンの相互理解の架け橋を担うことのできる人材を育成している。

また、社会組織として動くことによって、韓国人社会において最大の組織である「駐フィリピン韓人会」(会員数は約 1000 世帯) との交流が発展するようになった。国際結婚をした人々が、フィリピン人社会と韓国人社会の接点を結ぶ役割も果たし、相互に顔が見える関係を構築し始めている。

前述の A さんの話に戻るが、彼女がフィリピンで懸命に育児期間を過ごし、夫が亡くなってからは通訳者として経済的にも自立した時代と、今とではかなり韓国人社会の様相に変化がみられる。国際結婚をした韓国人女性が、韓国人社会においても自分の存在を見出すことができるようになり、暮らしやすくなっている。

A さんは、晩年をアメリカかフィリピンのどちらかで暮らすことを考えている。アメリカには、アメリカ人女性と国際結婚した息子がいる。フィリピンには娘がいる。

「私は今、アメリカとフィリピンを行ったり来たりしていますよ。フィリピンは住むにはいいところですよ。お金が少しでも、なくても暮らすことができます。寒くないです。英語を使うことができます。フィ

リピン人は外国人をとっても大切にしてくれます。おいしい食事も毎日できますし。時々、苦勞もありますけれど、私が信じているイエス・キリストの苦勞と比較すれば、私の苦勞は何でもないのでよね。神様を信じて生きていますから、私は幸福です。私の全てを神様に捧げています。そうすれば、神様は私にどうすればよいのか応えてくださいます。私は人を羨ましく思うことはないし、私を持っているものは、貧しい人に与えたいと思っています。」

Aさんと私の出会いは、ほんのひと時のことであつた。短時間で、凝縮された話をしてくださったことに感謝している。私は彼女の話から、彼女の人生をこう思った。彼女は、自分の身におこつた喜び、時には嘆き悲しみたくなるようなあらゆる出来事をも、信仰心によって肯定して考え、その都度、自分の人生を賢明に生き抜いてきた方なのだろうと。彼女の人生がさらに花開くことを祈りながら、またいつの日か再会できる時を心から願っている。